

岩山を切り取った「余水吐」から、連なる瀑布となり流下する洪水

— 香川県観音寺市 —

(株)チェリーコンサルタント 本 條 忠 應

1. 井関池の築造の歴史 (沿革)^{1)~3)}

井関池は、香川県の西端、大野原町大字五郷井関の県道観音寺佐野線沿いにある。現在の池の規模は、貯水量 54.0 万 m³、堤長 350.0 m、堤高 16.0 m である。昔、大 壺^{おおたらい}と呼ばれていたとあり、江戸時代初期の大野原の開墾と切っても切れない重要な池である。

(1) 西嶋八兵衛による築造計画 大野原の広大な原野に目をつけて、大規模な開拓計画を最初に立てたのは、寛永 15 (1638) 年頃、当時、讃岐の藩主だった生駒高俊の家臣で豊田郡奉行をつとめる西嶋八兵衛である。

西嶋八兵衛は、慶長元 (1596) 年遠州浜松に生まれ、17 歳の時に伊勢津藩主藤堂高虎に仕えた。慶長 19 年には大阪冬の陣、元和元年 (20 歳) には夏の陣において大功をあげるとともに、近習として京都二条城の築城や大阪城の修築に従事するなど若くして築城の技術に長けていた。その後、藤堂家と生駒藩との姻戚関係により客臣として来讃し、90 余りのため池を築き上げたと伝えられている。

西嶋八兵衛が築こうとした井関池は、大野原だけでなく杵田^{くした}から観音寺までも潤す満濃池にも劣らないほどの大規模なもので、東は地藏院山、西は鋳物師岡との谷を山の高さと杵田川を堰き止め上流落合橋付近まで満々と水をたたえようというものであった。そして自らが陣頭に立ち、あらましの堤形と 2 カ所の底樋にする石を小豆郡の豊島から運搬してきた巨石をあてがうなど完成をめざしていたが、生駒騒動のため寛永 16 (1639) 年津藩に帰ることとなり工事中止のやむなきに至った。

(2) 平田与一左衛門による開拓 西嶋八兵衛による井関池の築造は挫折したが、その後をうけて井関池(写真-1)を完成させ、今日の大野原の発展の基礎づくりをしたのは、平田与一左衛門と備中屋簾左衛門、三島屋又左衛門、松屋半兵衛たちである。池の築造は寛永 20 (1643) 年、近江の豪商平田与一左衛門が丸亀藩に願い出て町人普請として着手された。

しかし、当時の築堤は兩岸から進められ中央部の流心部は川水を通すため残し、最後に一気に締め切るという方法であった。そのため川の締切りを始めると、



写真-1 東余水吐とアーチ型堤体



写真-2 両側壁が岩肌のままの東余水吐
(和泉層群砂岩泥岩互層)

ゆるの取水穴しか安全に堤外に排水する施設がないことから、直後から水位の上昇(貯水)が始まることとなり、特に杵田川は流域面積が大きいことから流入する水量が多く、締切り箇所が弱点となりやすいという課題があった。

一方、余水吐の規模(洪水流下能力)は、当時築堤時には正確に見通すことができず、大雨による破堤と拡張を繰り返したが、承応 3 (1654) 年に堤防の復旧と東余水吐(写真-2)の拡張などがなされ、着手以来 12 年にしてようやく安定をみるに至った。

さらに明暦 2 (1656) 年 11 月に平田与一左衛門が他界した後、二代目与左衛門源助は寛文 3 (1663) 年、本拠を京都から大野原へ移し大野原開拓にすべてを賭けた。その後、相次ぐ干ばつや災害に苦しみながらも自

普請で進めてきた修築を藩普請に切りかえてもらうなど村づくりはようやく軌道にのり、元禄 10 (1697) 年の平田家の開墾新田 286 町に対し嘉永 4 (1851) 年には所有の田畑は 499 町にもなり隆盛を極めることとなる。

「讃岐のため池づくりの中で井関池ほど辛酸をなめた池は他にあるまい」と言われるなど、井関池は生駒騒動による西嶋八兵衛の去讃に加え、杵田川の本流を締め切る難工事と普請者の多大な経済的犠牲、地元民の過重な出役などを伴ったが、その後の多くの下流補助池の築造とともに、大野原村の基礎はゆるぎないものとなった。

2. 近代のダムなどの建設 (豊稔池)^{4),5)}

井関池の築造後、大野原は稔^{みの}りの大地へと姿を変えたが大正時代には二度の大干ばつに見舞われたことから、さらなる水源の必要性が叫ばれるようになり、昭和 4 (1929) 年に豊稔池、昭和 40 (1965) 年に五郷ダムが完成するとともに、昭和 50 (1975) 年に香川用水が通水した。井関池余水吐直下流に架かる日の出橋に併設されている杵田川水管橋 ($\phi 1.0\text{ m}$, $L=48\text{ m}$) (表紙写真) は、早明浦ダムを水源とし財田町の東西分水工を起点とする香川用水西部幹線の末端部に当たる。ここでは平成 18 年 12 月に国の重要文化財 (構造物) に指定された豊稔池について紹介する。

豊稔池は、井関池の上流大字田野々に杵田川本流を堰き止める形で建設されている。豊稔池が全国にその名を知られているのは、わが国のコンクリートダム築造技術がまだ草創期であった大正末期から昭和初年頃において、マルチプルアーチダム (多挟扶壁式粗石モルタル積み石堰堤) というわが国唯一の型式に加え、洪水吐を扶壁 (バットレス) の中に仕組んだサイホン式にするなど、きわめて先駆的な構造形式で建設されているからである。

豊稔池の設計・施工は、工学博士の佐野藤次郎氏と農林省技師の杉浦 翠氏の指導のもと大正 15 (1926) 年 3 月に着工し、わずか 3 年 8 カ月の間に延べ 15 万人の労力を注ぎ、昭和 4 年 11 月に竣工 (写真-3) した。池の規模は、貯水量 164.0 万 m^3 、堤長 128.0 m 、堤高 30.4 m である。

中世ヨーロッパの古城を思わせる偉容と高度な設計技術を取り入れた豊稔池は、景観的にも学術的にも他に類をみない貴重なダムとして高く評価されている。

盛夏の到来を告げるゆるぬき (写真-4) は、季節の風物詩となっており、豊稔池は一滴の水も無駄にしないという農家の強い意志から、ゆるぬきの日程を決めず井関池の貯水量との調整を図るため、毎年 7 月中旬から下旬に行われる。

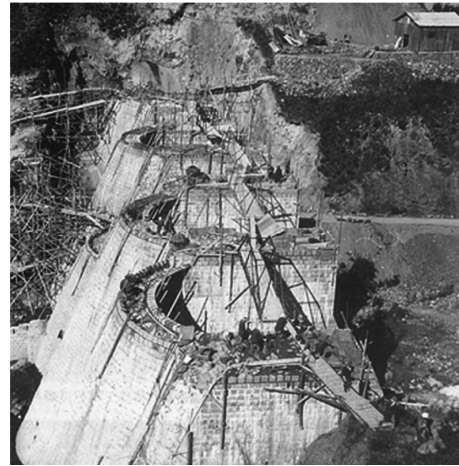


写真-3 昭和 4 年の築堤工事⁴⁾



写真-4 ゆるぬき

井関池の堤防の両脇には 1,000 株のツツジがあり、また隣接する五郷山公園には約 1,000 本の桜が植えられている。春から初夏の讃岐路にお越しの折は、散策を楽しまれてはいかがでしょうか。そして条件がよければ岩山を切り取った「余水吐」から、勢いよく流下する瀑布が見られるかもしれない。

引用文献

- 1) 大野原町開基記念誌編集委員会：大野原の開拓，pp.32～33 (1993)
- 2) 香川用水土地改良区：水利の開発に尽くした人々，pp.17～22 (1988)
- 3) 香川県農林水産部土地改良課：讃岐のため池誌，pp.125～134 (2000)
- 4) 豊稔池土地改良区：豊稔池の築造，口絵写真，pp.1～12, 73～74 (1994)
- 5) 香川県農政水産部土地改良課：豊稔池，パンフレット (2012)